

| | |
|--------------|---|
| Title | 故 溝口宏平教授 略歴 |
| Author(s) | |
| Citation | メタフュシカ. 2007, 38, p. 5-11 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/9902 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

故 溝口宏平教授 略歴

- 昭和21年7月8日 兵庫県に生まれる
- 昭和45年3月 京都大学文学部哲学科卒業
- 昭和47年3月 京都大学大学院文学研究科哲学専攻修士課程修了
- 昭和50年3月 京都大学大学院文学研究科哲学専攻博士課程単位取得退学
- 昭和50年10月 大阪電気通信大学非常勤講師
- 昭和51年3月 同上 辞職
- 昭和51年4月 大阪教育大学教育学部講師
- 昭和56年4月 大阪教育大学教育学部助教授
- 昭和58年3月 同上 辞職
- 昭和58年4月 大阪大学助教授教養部に配置換
- 昭和59年4月 教科用図書検定調査審議会調査員（昭和60年3月まで）
- 平成元年4月 大阪大学大学院文学研究科（併任）
- 平成5年4月 大阪大学教養部教授
- 平成6年4月 大阪大学教授文学部に配置換
- 平成6年5月 文学博士（大阪大学）
- 平成11年4月 大阪大学教授大学院文学研究科に配置換
- 平成12年4月 全学共通教育機構教育方法研究部長（平成14年3月まで）
- 平成14年4月 大阪大学評議員に併任（平成15年9月まで）
全学共通教育機構教務部長（平成15年9月まで）
- 平成16年4月 国立大学法人大阪大学教授大学教育実践センターに配置換
大学教育実践センター副センター長（平成16年12月まで）
大学教育実践センター教育実践研究部長（平成16年12月まで）
- 平成16年11月 休職
- 平成17年1月 復職
- 平成18年6月22日 逝去（59歳）

故 溝口宏平教授 研究業績等一覧

著書

- 1 『解釈学の課題と展開』(共著) 昭和56年6月 晃洋書房
- 2 『社会と歴史』(新岩波講座「哲学」第11巻)(共著) 昭和61年4月 岩波書店
- 3 HEIDEGGER and ASIAN THOUGHT (共著) 昭和62年 University of Hawaii Press
- 4 『哲学とはなにか』(共著) 昭和63年2月 勁草書房
- 5 『現象学と解釈学』上(共著) 昭和63年12月 世界書院
- 6 『性のポリフォニー — その実像と歴史をたずねて —』(共編著) 平成2年10月 世界思想社
- 7 『現代思想のトポロジー』(共著) 平成3年3月 法律文化社
- 8 『道徳規範の妥当根拠の総合的究明 — 「なぜ道徳的でなければならないのか」という問いをめぐって —』(編著) 平成4年3月 科学研究費補助金研究成果報告書
- 9 『超越と解釈 — 現代解釈学の可能性のために —』(単著) 平成4年9月 晃洋書房
- 10 『現代哲学を学ぶ人のために』(共著) 平成4年12月 世界思想社
- 11 『道徳の理由 — Why be moral? —』(編著) 平成4年12月 昭和堂
- 12 『久野昭教授還暦記念哲学論文集』(共著) 平成7年9月 以文社
- 13 『西田哲学を学ぶ人のために』(共著) 平成8年2月 世界思想社
- 14 『モラル・アポリア — 道徳のディレンマ —』(共編著) 平成10年2月 ナカニシヤ出版
- 15 『ディルタイと現代 — 歴史的理性批判の射程 —』(共著) 平成13年3月 法政大学出版局
- 16 『新世紀価値観 — 中日学者論文集 —』(共著) 平成14年7月 南開大学出版社(中華人民共和国)
- 17 『科学と社会』(編著) 平成16年2月 科学研究費補助金研究成果報告書

論文

- 1 ハイデッガーに於る有の問と歴史(単著) 昭和49年2月 『哲学論叢』No.1 京都大学『哲学論叢』刊行会
- 2 ハイデッガーに於ける技術への問い(単著) 昭和50年1月 『理想』No.500 理想社
- 3 ハイデッガーと時の問題(I)(単著) 昭和53年3月 大阪教育大学紀要第26巻第3号
- 4 解釈学的哲学の根本問題 — その理論的基礎づけの問題と哲学の可能性への問い — (単著) 昭和54年5月 『思想』No.659 岩波書店
- 5 実践と理解 — 実践の問題への解釈学的接近の試み — (単著) 昭和56年6月 『思想』No.684 岩波書店
- 6 ウィトゲンシュタインと哲学の自己否定(単著) 昭和57年12月 『ディアロゴス』No.1 哲学・教育研究会
- 7 ハイデッガー後期思想への道(第1報) — プレーメン講演『あるといえるものへの観入』

- の解釈を通して — (単著) 昭和 58 年 2 月 大阪教育大学紀要第 31 巻第 2・3 号
- 8 ハイデガーと技術の問題 (単著) 昭和 60 年 10 月 日本倫理学会論集 20 『技術と倫理』 以文社
 - 9 初期ハイデガーにおける事実性の解釈学の理念とその射程 (単著) 平成 2 年 10 月 『現象学年報』 6 日本現象学会
 - 10 事実と解釈 — 初期ハイデガーにおける『事実性の解釈学』の理念を手掛かりとして — (単著) 平成 4 年 3 月 関西哲学会紀要第 26 冊
 - 11 An interpretation of Heidegger's Bremen lectures : towards a dialogue with his later thought (単著) 平成 4 年 Christopher Macann(ed.) MARTIN HEIDEGGER Critical Assessments, Volume I, Philosophy, Routledge
 - 12 歴史現象の存在論的解釈の可能性について — ハイデガーの『存在史』をわれわれはどのようにに評価すべきか — (単著) 平成 9 年 1 月 『現象学年報』 12 日本現象学会
 - 13 解釈学的現象学の成立とその射程 (単著) 平成 10 年 12 月 『メタフュシカ』 29 号 大阪大学大学院文学研究科哲学講座
 - 14 自然と人間との新たな関わりのために (単著) 平成 13 年 2 月 『自然のなかの人間』 科学研究費補助金研究成果報告書
 - 15 精神科学における基礎付けの概念 (単著) 平成 13 年 12 月 『待兼山論叢』 35 号 大阪大学文学会

翻訳

- 1 O. ベゲラー著『ハイデッガーの根本問題 — ハイデッガーの思惟の道 — 』(共訳) 昭和 54 年 2 月 晃洋書房
- 2 T. W. アドルノ著『本来性の隠語』(共訳) 平成 2 年 12 月 『文藝』 第 29 巻第 5 号 河出書房新社
- 3 G. フィガール著「命運としての歴史と歴史の現前 — 哲学を規定するための考察 — 」(単訳) 平成 5 年 12 月 『21 世紀の世界像を求めて — 哲学・芸術・宗教 — 』 大阪大学「21 世紀の世界像を求めて」国際シンポジウム実行委員会
- 4 ニーチェ著「神の死」(単訳) 平成 12 年 6 月 『哲学を読む』大浦康介他編 人文書院
- 5 ハイデガー著「無への問い」(単訳) 平成 12 年 6 月 『哲学を読む』大浦康介他編 人文書院

学会発表

- 1 ハイデッガーの技術論 昭和 59 年 10 月 日本倫理学会第 35 回大会
- 2 超越論的主体性の現代的意義 — ハイデガーの思惟の証明の下で — 昭和 61 年 11 月 日本フィヒテ協会第 2 回大会シンポジウム
- 3 哲学の言語 — メタファーをめぐる — 昭和 62 年 11 月 第 10 回現象学解釈学研究会シンポジウム

- 4 事実と解釈 — 初期ハイデガーにおける「事実性の解釈学」の理念を手掛かりとして —
平成3年10月 関西哲学会第44回大会
- 5 現代における解釈学の可能性を問う 平成3年11月 1991年度日本デルタイ協会大会シンポジウム
- 6 歴史性の問題をめぐって — ハイデッガーと西田幾多郎 — 平成5年7月 日本デルタイ協会平成5年度研究会
- 7 歴史 平成7年11月 日本現象学会第17回研究会シンポジウム
- 8 为了自然与人類新的關係（自然と人間の新たな関わりのために）及び大会総括 平成12年9月 南開大学「新世紀価値観」国際シンポジウム
- 9 精神科学の基礎付けの目標とその限界 平成12年12月 2000年度日本デルタイ協会大会

その他

- 1 【学術報告】解釈学の課題（単著） 昭和59年11月 京都新聞
- 2 【解題】隠語化するハイデガー批判と隠語としてのハイデガー（単著） 平成2年12月 『文藝』第29巻第5号 河出書房新社
- 3 【書評】O. F. ボルノー著『解釈学研究』西村皓・森田孝監訳、『思索と生涯を語る』石橋哲成訳（単著） 平成3年8月 『週間読書人』第1896号 読書人
- 4 【事典項目】『哲学入門・哲学基本事典』（共著） 平成4年4月 富士書店
- 5 【事典項目】『現象学事典』（共著） 平成6年3月 弘文堂
- 6 【書評】ウェルナー・マルクス著『地上に尺度はあるか』上妻精・米田美智子訳（単著） 平成7年2月 『週間読書人』第2073号 読書人
- 7 【書評】ルードルフ・A・マックリール著『デルタイ — 精神科学の哲学者』大野篤一郎・田中誠・小松洋一・伊東道生訳（単著） 平成7年12月 『カンティアーナ』第26号 大阪大学文学部哲学哲学史第二講座
- 8 【書評】四日谷敬子著『ハイデッガーの思惟と芸術』（単著） 平成8年9月『人環フォーラム』No.1 京都大学大学院人間・環境学研究科
- 9 【事典項目】『岩波哲学・思想事典』（共著） 平成10年3月 岩波書店
- 10 【学術報告】第5回解釈学シンポジウム『デルタイ』（単著） 平成10年9月 『デルタイ研究』第10号 日本デルタイ協会
- 11 【エッセー】私達は何を羨むべきなのか？ — ドイツの大学の一般教育科目 — （単著） 平成11年3月『共通教育だより』第8号 大阪大学全学共通教育機構
- 12 【解説】ニーチェ：神の死（単著） 平成12年6月 『哲学を読む』大浦康介他編 人文書院 [上記翻訳4. 及びニーチェ思想についての解説]
- 13 【解説】ハイデガー：無への問い（単著） 平成12年6月 『哲学を読む』大浦康介他編 人文書院 [上記翻訳5. 及びハイデガー前期思想についての解説]
- 14 【エッセー】現代中国の大学事情管見 — 天津市・南開大学を訪問して — （単著） 平成12年

- 10月 『共通教育だより』第13号 大阪大学全学共通教育機構
- 15【学術報告】現代中国文化事情管見(单著) 平成13年1月 『宝積』第18号 宝積比較宗教・文化研究所
- 16【エッセー】「教養」とはなにか?(单著) 平成13年7月 『共通教育だより』第16号 大阪大学全学共通教育機構
- 17【事典項目】『事典・哲学の木』(共著) 平成14年3月 講談社
- 18【エッセー】「教養」とは何か(单著) 平成14年4月 『ムネーモシュネー』第3号 大阪音楽大学美学研究会[上記、16.【エッセー】を改筆したもの]
- 19【講演】体験的課題追求型授業の導入 平成14年5月 平成14年度国立大学教養教育実施組織会議第3分科会
- 20【エッセー】学ぶことと人間の歴史への依存性 — 過去と将来の接点としての大学 — (单著) 平成14年7月 『共通教育だより』第20号 大阪大学全学共通教育機構
- 21【講演】大学の取組について 平成14年11月 大阪府立高等学校長協議会進学指導委員会
- 22【エッセー】教養教育の復権とその意義(单著) 平成15年4月 『共通教育だより』第22号 大阪大学全学共通教育機構
- 23【講演】大阪大学における独立行政法人化と入試の動向について 平成15年8月 大阪府高等学校進路指導研究会

故 溝口宏平教授 功績覚書

故 溝口宏平教授は、昭和 21 年 7 月 8 日兵庫県に生まれ、昭和 45 年 3 月京都大学文学部哲学科を卒業、昭和 47 年 3 月京都大学大学院文学研究科哲学専攻修士課程を修了、昭和 50 年 3 月京都大学大学院文学研究科哲学専攻博士課程を単位取得退学後、昭和 51 年 4 月大阪教育大学教育学部講師（哲学担当）に就任、昭和 56 年 4 月同助教授に昇任、その後、昭和 58 年 4 月大阪大学教養部助教授（倫理学担当）に配置換となり、平成 5 年 4 月同教授に昇任、平成 6 年 4 月大阪大学文学部教授（哲学哲学史講座）に配置換、また同年 5 月大阪大学より博士（文学）の学位を授与された。大阪大学大学院文学研究科教授（文化形態論専攻、哲学講座、現代思想文化学専門分野）を経て、平成 16 年 4 月大阪大学大学教育実践センター教授（教育実践研究部、教育評価部門）に配置換となった。

この間、同教授は西洋現代哲学、とくに 20 世紀ドイツにおける現象学と解釈学の研究に従事し、とりわけハイデガーの解釈学的思惟の研究に関して多くの優れた研究成果を挙げるとともに、大阪教育大学教育学部に着任以来、哲学・倫理学の講義を担当して学生の教育に当たり、大阪大学大学院文学研究科教授に就任してからは研究者の育成にも尽力し、豊かな学殖と厳しい自己研鑽に裏付けられた、その指導により優れた人材を学界へ送り出した。大阪大学大学教育実践センター設立に際しては、同センター設置準備委員会専門委員会委員として活躍し、設置案策定に直接携わった。同センター設立と同時に専任教授として着任、教育実践研究部長の役職を担い運営をリードしたが、間もなく不治の病に倒れ、平成 18 年 6 月 22 日、惜しくも逝去した。

同教授の研究における第一の専門領域はハイデガー哲学研究であるが、この哲学者の思索過程を前期、中期そして後期へと辿る精緻な文献学的研究は、デイルタイからガダマーへの解釈学的哲学の伝統形成におけるハイデガーの果たした特異な役割、すなわち解釈学の存在論的基礎付けと解釈学的思惟と存在論的思惟の統一の意義を実証的に解明するとともに、解釈学の哲学化と哲学の解釈学化の孕む問題性を示すものであった。平成 4 年に刊行され、のちに博士学位を与えられることになった主著『超越と解釈 — 現代解釈学の可能性のために —』は、この領域における研究成果を集約すると同時に、解釈学的思惟の乗り越えを目指した労作である。人間の思惟は有限であり、一定の制限内を動く（被解釈性）。しかし被解釈性そのものが扱われる視点が確保されるなら、被解釈性が廃棄されることなく、被解釈性に囚われない視点が得られるのではないか。このような視点は普遍的であるが故に哲学的視点である。人間の思惟は経験に即しつつ哲学的たらんとするかぎり、解釈とそこからの超越との双方に関わらざるを得ない。この著作は、かくして解釈学批判というあり方をした哲学的思惟の可能性を探る点でユニークなものである。

第二の専門領域として、比較思想的見地からした西田哲学の研究があるが、デイルタイと西田、ハイデガーと西田を、単なる受容の研究としてではなく、歴史意識や無の概念をめぐる両者の思想の類似と相違の解明を狙って比較し、東西思想の対話の地平を開くものである。

さらに第三の専門領域として、現代の倫理学、とくに環境思想ならびに環境倫理学の研究がある。生命中心主義、ネオ功利主義、動物の権利等の現代の問題を論じ、さらに現代の環境思想に

哲学的視点から検討と批判を加え、新たな哲学的自然観の樹立の必要性を訴えるとともにエレガントな技術の道を示そうとした論考は中国語に翻訳され、『新世紀価値観 — 中日学者論文集 —』（共著）として出版されている。また、この領域における同教授の活躍は、この著作がそうであるように国際学術交流にもおおいに寄与するものであった。

同教授は学会活動においても、日本倫理学会評議員、関西倫理学会委員等を歴任し、哲学・倫理学研究の発展に尽力した。

近年の大学改革における同教授の貢献は特筆に値する。平成 12 年度に着手された大学評価に際しては、評価委員会専門委員会委員（全学テーマ別評価「教養教育」自己評価書作成責任者）として中心的役割を担った。大阪大学大学教育実践センターへ移籍後は、全学共通教育における授業評価システムの構築に尽力した。

以上のように、同教授は研究者、教育者として学内及び学外において多くの業績を残し、学問と大学の発展に大きく貢献した。この功績は誠に顕著である。

（文、望月太郎）